症例報告

エアデール・テリアの1家系に生じた 再発性けん部脱毛症

村山信雄^{1)*} 高橋尚子¹⁾ 樋詰俊章¹⁾ 永田雅彦²⁾

¹⁾めむろ動物病院, ²⁾ASC どうぶつ皮膚病センター

要 約

6歳齢、雌のエアデール・テリアに、両けん部とともに鼻梁と両耳介の色素性脱毛を認めた。脱毛は1歳より始まり、毎年2月から8月に認められた。血液検査、血液化学検査、甲状腺ホルモン検査に特記すべき異常はみられなかった。皮膚病理組織検査で角質肥厚を伴う毛漏斗の開大と表皮メラニン色素の増加がみられた。以上より、再発性けん部脱毛症と診断した。別家庭で飼育されている母犬と同腹子1頭にも同様の脱毛症が認められた。われわれが調べ得た限り、これまでに本症が家族性に発生した症例の報告はなかった。

キーワード：犬，脱毛，家族性発症

緒 言

犬の再発性けん部脱毛症は、晩秋に発症し春に自然軽快するけん部の脱毛を特徴とする^{6,7,10)}。エアデール・テリア、イングリッシュ・ブルドッグ、ボクサーに好発し、ミニチュア・シュナウザー、ミニチュア・プードル、ドーベルマン・ピンシャーなどにも発症するが、これまで家族性に発症した症例の報告はない^{1,3,4-7,9-11)}。われわれは両けん部とともに鼻梁、両耳介、および尾根部にも脱毛を認めた再発性けん部脱毛症のエアデール・テリアの一家系を経験したので報告する。

症例報告

症例はエアデール・テリア、雌、6歳齢、体重25 kg、屋外飼育、1歳頃より毎年2月に発症し8月に改善する脱毛を主訴に平成15年3月31日当院受診となった。発症は定期的に認め、この時期に関連した不調や皮膚異常を訴えることはなかった。現症として両けん部に境界明瞭な地図状の色素性脱毛斑が認められた。また鼻梁、両耳介外側、および尾根部にも同様の色素性脱毛がみられた (Fig. 1)。皮疹を除き、代謝異常を示唆する臨床兆候はまったく認められなかった。鼻梁、耳介、およびけん部に生じる脱毛症の鑑別として、再発性けん部脱毛症、内分泌疾患 (甲状腺機能低下症、性ホルモン失調)、休止期脱毛状態、毛包性感染症などを疑い、諸検査を実施した。毛検査、皮膚搔爬検査、真菌培養検査、血液検査、血液生化学検査、血清総サイロキシン、遊離サイロキシン、犬甲状腺刺激ホルモンを

* 連絡先：村山信雄 (めむろ動物病院)
〒082-0034 北海道河西郡茅室町西4条5丁目3-16
TEL 0155-62-8388 FAX 0155-62-8444
E-mail: m.a.c@siren.ocn.ne.jp

A

B

C

D

Fig. 1. Clinical features of this case. Note “geographic” pigmented alopecia on the flank (A), pigmented alopecia on the nose bridge (B), and the pinnae (C, D).

施行したが、特記すべき異常を認めなかった。皮膚病理組織学的検査では、足跡のような形を特徴とした毛包、すなわち角質肥厚を伴う毛包漏斗部の開大と毛包上皮の萎縮、そして漏斗部に連続して同様の特徴を有した第2毛包が認められた。また表皮基底層および脂腺導管にメラニン色素の増加がみられた (Fig. 2)。

脱毛は鼻梁や耳介にも認められたが、臨床像および諸検査より再発性けん部脱毛症と診断した。飼主にそう痒や疼痛を伴わない季節的な脱毛症と説明したところ、無処置経過観察を希望した。念のため家族歴を聴取したところ、別家庭で飼育されている母犬 (9歳齢) と同腹子 (6歳齢、雌) にも同様の症状がみられることが明らかにされた。後日母犬と同腹子1頭を診察した。2頭ともけん部と鼻梁に脱毛がみられ、母犬は耳尖にも脱毛が認められた (Fig. 3)。当初これら2頭は室内で飼育されていたが、3年前より屋外飼育となり、その後毎年2月から8月に脱毛が反復するようになった。

Fig. 2. Histopathological features of the case. Note dilation of follicular infundibula with hyperkeratosis. (H&E stain, $\times 13.2$).

Fig. 3. Clinical features of her littermate. Note pigmented alopecia on the nose bridge and the flank.

考 察

犬の再発性けん部脱毛症は毎年同じ季節に生じるけん部の脱毛を特徴としているが^{1,3,4,9-11)}, まれながら鼻梁や耳介にも脱毛が生じると記載されている^{6,7)}。本症では鑑別および合併として常に内分泌疾患に留意するが^{2,7)}, けん部とともに鼻梁, 耳介, 尾根に対称性脱毛を認めた自験例では特にその評価を慎重に行う必要があった。臨床的に甲状腺機能低下症を示唆する皮膚科以外の症状はなく, 血液検査および種々甲状腺ホルモン値にもまったく異常を認めず, 甲状腺機能異常は否定的と思われた。他の内分泌疾患として性ホルモン失調による脱毛を否定することはできないが, 自験例の皮疹は少なくとも発情に一致せず毎年同じ季節に反復してみられた。以上より, 自験例は鼻梁と両耳介にも脱毛が生じた再発性けん部脱毛症と診断するのが妥当と判断した。このように脱毛がけん部に限定されない症例では診断や患者への説明に混乱を生じやすく, 今後より適正な病名の検討も必要と思われた。

再発性けん部脱毛症の病態として, 松果体のメラトニンレベルと下垂体のプロラクチンレベルによる光周期や遺伝的素因の関与が推測されている^{7,8)}。今回, 自験例の母犬や同腹子にも本症に合致した脱毛がみられた。残念ながら飼主の意向により諸検査を実施することはできなかったが, 臨床像は再発性けん部脱毛症の典型であった。大規模な家系調査を実施することはできなかったが, 本症が家族性に発症する可能性が推測された。これまで本症における犬種好発性が指摘さ

れているが, われわれが調べ得た限り家族発生は自験例が第1例であった。今後本症における遺伝形式に関する検討も必要と思われた。

自験例は飼育当初より屋外で飼育され, 1歳より発症がみられた。また, 母犬と同腹子は室内飼育時に脱毛を認めず, 屋外飼育になってから季節性脱毛が生じた。安藤らは本症を発症したボクサーを脱毛のみられない夏に屋内暗室で管理するとけん部の定型疹が新生し, その脱毛は本来の屋外飼育に戻すと改善すると報告している⁹⁾。したがって本症の病態には遺伝的要因とともに, 誘因として自然光の刺激や周期が積極的に関与していることが示唆された。なお再発性けん部脱毛症は北半球北緯45度付近以北に好発すると指摘されている^{6,7)}。日本では北海道がその地域に当たり, 自験例はまさに好発地域であり2月から8月に発症を認めた。本邦で報告されている症例はいずれも北緯45度以南であり^{1,3,5)}, 脱毛は12~1月に発症し6~7月に軽快している^{1,3)}。脱毛の発症時期が若干異なるが, これは緯度との関係も予想された。今後さらに症例を集積し, 疫学的解析が必要と思われた。

本症例の概要は, 第7回日本獣医皮膚科学会学術大会にて発表した。

引用文献

- 1) 安藤 純, 永田雅彦. 2000. 獣医皮膚科臨床 6: 17-20.
- 2) Daminet, S. and Paladis, M. 2000. *Can. Vet. J.* 41: 699-703.
- 3) 伊藤素美, 永田雅彦, 佐藤常男. 1997. 日本大学獣医学雑誌 43: 37-40.
- 4) Miller, M.A. and Dunstan, R.W. 1993. *J. Am. Vet. Med. Assoc.* 11: 1567-1572.
- 5) 松田寿彦. 2004. 獣医臨床皮膚科 10: 135.
- 6) Paradis, M. 1998. *Derm. Dialogue*, Summer: 10-13.
- 7) Paradis, M. and Cerundolo, R. 2003. pp. 83-93. Foster, A. and Foil, C. In: *BSAVA Manual of Small Animal Dermatology* 2th ed., British Small Animal Veterinary Association, Quedgeley.
- 8) Rachid, M.A., Demauula, C.D., Scott, D.W., Miller, W.H., Senter, D.A. and Myers, S. 2003. *Vet. Dermatol.* 14: 159-166.
- 9) Scott, D.W. 1990. *Cornell. Vet.* 80: 187-195.
- 10) Scott, D.W., Miller, W.H. and Griffin, C.E. 2001. pp. 890-893. In: *Small Animal Dermatology* 6th ed., W.B.Saunders, Philadelphia.
- 11) Waldman, L. 1995. *J. Small Anim. Pract.* 36: 272-273.

Canine Recurrent Flank Alopecia with Hair Loss on the Nose Bridge and the Pinnae in a Family of Airedale Terrier

Nobuo Murayama^{1)*}, Shoko Takahashi¹⁾, Toshiaki Hizume¹⁾, Masahiko Nagata²⁾

¹⁾Memuro Animal Clinic, ²⁾Animal Dermatology Center, ASC

Abstract: A 6-year-old female Airedale Terrier presented with pigmented alopecia on the nose bridge, the pinnae, and the bilateral flank. Alopecia had been recognized at 1 year of age, and has been seen from February to August every year. Complete blood counts, blood chemistry analyses, TT4, fT4, and C-TSH level did not show any abnormalities. Histopathologic examination of the skin lesion revealed dilation of the follicular infundibula with hyperkeratosis and epidermal hyperpigmentation. Based on these findings, this dog was diagnosed as having recurrent flank alopecia with hair loss on the nose bridge and the pinnae. Her mother and a littermate had been kept by a different owner and had similar clinical findings of recurrent seasonal alopecia on the same areas. To the best of our knowledge, this is the first case of familial onset of the alopecia.

(Jpn J Vet Dermatol 2005, 11 (1): 1–4)

Key words: alopecia, dog, familial onset

*Correspondence to: Nobuo Murayama (Memuro Animal Clinic)
4-5-3-16 Nishi 4-Jou, Memuro, Kasai-gun,
Hokkaido 082-0034, Japan
E-mail: m.a.c@siren.ocn.ne.jp